

近衛家における蘇軾の詩文

松尾肇子

したい。

一、近衛家所蔵蘇軾詩集・文集の書誌

資料収集に努力しただけでなく、その保存にも力を尽した近衛家ではあるが、明治維新時には混乱があった。東京への移住に際して、最善の蔵書は東京へ運ばれて学習院に寄託され、その他は京都の数箇所に預けられた。その後明治三〇（一八九七）年、京都に残されたものは京都帝国大学図書館にまとめて寄託された。更に、昭和二三（一九三八）年、現在地の京都市宇多野に書庫を建設して、東京と京都に分散していた蔵書を収納し、財団法人陽明文庫として現在に到る。但し、京都大学への寄託を解除した際、一部を京都大学へ寄贈した。従って、近衛家蔵書の江戸時代以前の姿をうかがうには、陽明文庫と京都大学付属図書館収蔵書とを合わせ見なければならない。この二館には、蘇軾の詩集三本および文集二本が収蔵される。以下、時代順にこれらの書誌情報を記載し、さらに関連の四本を紹介する。

（一）王状元集百家註分類東坡先生詩二五卷 宋・蘇軾撰、宋・王十朋纂集、宋・劉辰翁批点（陽明文庫蔵 一〇冊）

覆刻元版五山版、元版逸修本。第一〜三冊および第八〜一〇冊は五

近衛家は五撰家筆頭の名門で、歴代当主は朝廷官職の最高位に上ることが当然であり、朝廷儀式などに関する記録を代々伝え遺すことを家憲とした。また勉学に励み、善本を収集し、他家の書籍を借りて写した。その結果、文化の庇護者となるとともに、各時代に和漢の学、および書をはじめとする諸芸に優れた人物を生み出した。歴代当主が和歌をはじめとする本朝文化の精華を体現していたことはよく知られるが、漢文の素養にも浅からぬものがあつた。もっともその対象には変化がある。『文選』に代表される六朝の美文や白居易を筆頭とする唐詩を尊重する時代が長かった公家も、鎌倉・室町時代五山禅林の風潮を承け、『古文真宝』や『三体詩』、蘇軾（字は子瞻、号は東坡居士）や黄庭堅（字は魯直、号は山谷道人）ら宋詩を学んだ。ことに蘇軾は、『正法眼蔵』第二五「溪声山色」に、

大宋国に東坡居士蘇軾とありしは、字は子瞻といふ。筆海の真龍なりぬべし、仏海の龍象を学す。重淵にも游泳す、曾雲にも昇降す、

と記されたように、禅林では格別の尊崇を受けた。蘇軾をいかに受容し消化したのかは、日本における中国古典受容の一面として決して小さくはない問題であろう。筆者にはその全体像を描くことはできないが、本稿では公家を代表する近衛家歴代の営みの中で収集された蘇軾の詩文集を紹介し、近衛家における漢学および蘇軾受容の実際を紹介

山版。第四冊（卷九・一〇）第五冊（卷一一・一二）は同版後印本を補配。第六冊（卷一三・一四）は別種同版後印本を補配。第七冊（卷一五・一六）は元版を補配、総裏打ち。全冊に、京都大学寄託時の外表紙を付す。

三種の五山版はすべて同版で、左右双辺（一九・八×二二・八センチ）、有界、每半葉一二行、毎行一九字、注双行二五字。版心は線黒口、双魚尾。第六冊は楮紙を、他の冊は薄様の和紙を使用する。元・建安の熊氏本を翻刻したものである。

第七冊補配の元版は、「増刊校正王狀元集註分類東坡先生詩」とし、四周双辺（一九・八×二二・四センチ）、有界、每半葉一二行、毎行二二字、注は双行二六字。福建の出版中心地であった建安刊本の字様で彫られており、刷りは良い。版式から、元・廬陵の某氏書堂本であろう。

表紙（二六・〇×一六・五センチ）は紺色、四針眼。表紙裏打ちに古活字本「論語集解」が用いられていることから、一七世紀初めの改装と思われる。題箋には「東坡先生詩 幾之幾」と墨書。各冊首葉に「近衛藏」の朱文長方印、及び明治時代学習院に預けられた時に押された「陽／明／藏」の朱文方印がある。

朱の断句・朱引き、墨の訓点・書入れは、版毎に異なり、第一―三冊、第八―一〇冊の五山版には、まれに朱で校字が書き入れられ、墨で書入れが施されている。墨の書入れの字体は二種ある。一種はやや大ぶりの字で、各詩題の上に製作年を施すほか、出典を示す。右肩下がりの小ぶりの字は、抄物を含む書入れである。小字の書入れは、第二冊と第九冊ではほぼ全冊にわたり、他の冊では疎密がある。また、卷四末葉に「天正十三年 内大臣 信輔」、卷六末葉に「天正十三年」の識語が、卷五巻首に花押があり、これらは第一七代当主近衛信尹による。彼については次章で紹介する。後印補配の第四・五冊と別種の第六冊にも書入れはあるが、それぞれ別筆である。第七冊の元版の書

近衛家における蘇軾の詩文

入れはごくまれで、校字、付訓、朱引き、注文に朱の断句がある。上記の情况から、五山版・二種の別本五山版・元版は、書入れが施されたのち、一組に組み合わされて改装されたと推定できる。

（二）東坡先生詩二五卷 宋・蘇軾撰（陽明文庫藏 一三冊）

慶長年間（一五九六―一六一五年）の鈔本。分類本東坡詩の本文のみ収録する。字高約二三・〇×一六・五センチ。每半葉一〇行毎行二〇字。香色表紙（二六・七×二〇・九センチ）の題箋には「蘇東坡詩 幾之幾」と書写、四針眼。各冊首葉に「近衛藏」の朱文長方印、及び明治時代の「陽／明／藏」の朱文方印がある。書根には「雪／堂」の墨記あり。

朱の断句・朱引きが卷七まで付される。但し、卷一の「太白山下早行至横渠鎮」から「淮河早發」まで、卷二巻頭から「虔州八境圖八首」まで、卷三、卷七「和田國博喜雪」以後巻末までではない。卷四―六は全冊に施される。墨の片仮名による付訓（送り仮名・読み仮名）・返点は全冊にわたり、卷一五「將之湖州戲送莘老」第四句から卷一五末までを欠くのみ。第一冊後ろ見返しに「湯温谷似而芸公与一校了（湯温谷にて芸公と一校しおわんぬ）」、第三冊巻五末に「于時寛正三年仲春十一日於德芳軒下書之」、以下各巻ごとに同種の原奥書が続き、第一〇冊巻二〇末の「于時寛正三年壬午九月十五日書德芳軒了」に終わる。寛正三年は一四六二年室町將軍足利義政の時代であり、墨の付訓は五山僧の訓読を伝える。

（三）東坡先生全集七五卷 宋・蘇軾撰、明・陳仁錫評（京都大学付属図書館藏 四八冊）

明版。左右双辺（一九・九×一四・一センチ）、本文每半葉一〇行、毎行一九字。序每半葉五行、毎行九字。有界。版心は白口、「東坡全集」の書名および巻数・丁数を記す。封面に「陳明卿太史訂正／蘇文

近衛家における蘇軾の詩文

忠公全集／金閨寶翰樓藏版」と記す。版式は明末の文盛堂刊本と同じ。宝翰樓は、明末清初呉郡の人である尤雲鶚の書齋名であり、『東坡先生詩集注』三二巻も刊行した。

黄土色の表紙（二六・〇×一六・七センチ）には、「東坡全集 幾之幾」と打付けがきし、藍色の紙を角布として用いる。四針眼。さらに、京都大学であつた鉄色布張りの五秩に収納する。ここに紹介する京都大学付属図書館所蔵の三本はいずれも同様の秩に納められている。以下は省略する。

各冊首葉に「陽／明／蔵」の白文方印、明治時代の「陽／明／蔵」の朱文方印、京都大学収蔵時の「京都／大学圖／書之印」「近衛本」の朱文方印がある。白文方印の陽明蔵印により、第二世代当主近衛家熙の収蔵と推定できる。巻一の「灝瀕堆賦」に朱の断句。その外に書入れ等は無い。本書は（一）（二）の二本が詩集であるのと異なり、文集である。

（四）東坡集選五〇巻年譜一卷外紀二巻外紀逸編一卷集餘一卷 宋・蘇軾撰、明・陳繼儒編、明・陳夢槐選、年譜宋・王宗稷撰、外紀明・王世貞撰、外紀逸編明・璩之璞編、集餘明・潘允宜編（京都大学付属図書館蔵 一六冊）

明版。四周单边（二一・五×一三・五センチ）、本文每半葉九行、毎行九字、序每半葉五行、毎行二字。有界。版心は白口、白魚尾、書名、巻数、丁数を記す。巻二一から巻二五までに乱丁が見られる。第一冊の香色表紙（二七・六×一六・六センチ）には「東坡集選年譜」、第三冊以下は「東坡集選 幾之幾」と打付け書き。第二冊の表紙は失われている。四針眼。各冊首葉に明治時代の「陽／明／蔵」の朱文方印（但し一部は見返しに押印）、京都大学収蔵時の「京都／大学圖／書之印」「近衛本」の朱文方印がある。

巻一二まで、朱の断句・朱引きが断続的に書き込まれている。また、

巻四三以下集餘末まで、数葉を除き朱の断句・朱引き。

（五）東坡先生詩集三二巻年譜一卷 宋・蘇軾撰、宋・王十朋編、明・陳仁錫評、年譜宋・王宗稷撰（京都大学付属図書館蔵 二〇冊）

日本の明暦三（一六五七）年、林和泉掾松柏堂時元印。四周单边（二〇・九×一四・〇センチ）、本文每半葉一〇行、毎行二〇字、注は双行二〇字、紹興三二年勅命每半葉五行、毎行一〇字。有界。版心は白口、黒魚尾、書名の「東坡詩集」、巻数、分類題目、丁数を記す。封面には「陳明卿太史評／蘇東坡全集／潜確居藏版」と刻しており、明版を底本にして本文注文とも送り点送り仮名を付して刊行したものである。

香色表紙（二八・〇×一九・三センチ）には「東坡詩集」の刷題箋を付す。四針眼。各冊見返しに明治時代の「陽／明／蔵」の朱文方印、首葉に京都大学収蔵時の「京都／大学圖／書之印」「近衛本」の朱文方印がある。書入れは無い。

（六）四河入海二五巻 笑雲清三述（陽明文庫蔵 一〇〇冊）

日本・古活字版。『増刊校正百家註東坡先生詩』本文に禅僧による注解を施した抄物。四周单边（二一・〇×一六・五センチ）、本文每半葉九行、毎行一八字、抄は漢字片仮名、每半葉一七行、毎行一八字。無界。版心は粗黒口、黒魚尾。書名、巻数、分類題目、丁数を記す。巻二四の一の一冊を欠き蓬左文庫本影印にて補う。巻二一之二および巻二五之四の裏表紙は後補。桐箱入り。

表紙（二八・〇×二〇・五センチ）は栗色、四針眼。「四河入海 幾之幾」と打付けがき。各冊首葉に「近衛蔵」の朱文長方印、及び明治時代の「陽／明／蔵」の朱文方印がある。朱の断句・朱引き、墨で返点・付訓、多くはないが郭外上頭や行間に朱墨の書入れを施す。笑雲清三自筆付訓等の転写を重ねたものだが、陽明文庫所蔵本には精粗

があり、かつ多くない。卷六之三・四、卷一一之三、卷一二、卷一五以下は卷一七之二を除き白文である。ごくまれに誤植の訂正など自筆本にはない補注がある。書入れは近衛家以外の複数の人物の手による。各冊首葉に「近衛藏」の朱文方印、明治時代の「陽／明／藏」の朱文方印がある。

(七) 五先生小簡不分卷 (陽明文庫藏 一冊)

江戸初期鈔本。四周单边 (字高二・〇×一五・五センチ)、每半葉一〇行、毎行二〇字。胡桃色の表紙 (二六・六×二〇・三センチ) に雷地花草文の型押。書根に「小／簡」と墨書する。明治時代の「陽／明／藏」の朱文方印がある。朱の断句・朱引き。墨の付訓。

「東坡先生蘇公 (すなわち軾) 小簡」、以下、孫仲益尚書 (觀)、盧柳南 (方春)、方秋崖 (岳)、趙清曠の書簡を収録する。

(八) 物類相感志一卷 (陽明文庫藏 一冊)

日本の元禄三 (一六九〇) 年、京都林九兵衛版行。四周单边 (二七・六×一二・八センチ)、每半葉九行、毎行一八字、無界。版心は、粗黒口、黒魚尾、書名、丁数を記す。本文・付訓とも整版。表紙 (二二・四×一五・九センチ) に「東坡物類相感志」の刷り外題、四針眼。著者を蘇軾とするが、仮託である。近衛家熙による朱の書き入れが、首葉のみ郭外上頭及び行間に施され、その内容は和名や注で、整版の付訓を二箇所訂正する。明治時代の「陽／明／藏」の朱文方印がある。

(九) 樂城集五〇卷、後集二四卷、三集一〇卷 宋・蘇轍撰 (京都大学付属図書館蔵 二六冊)

蘇軾の弟蘇轍の詩文集である。明・嘉靖二〇年銅活字本。四周单边 (一九・〇×二三・五センチ)、每半葉一〇行、毎行二〇字、注は小字双行二〇字、有界。版心は、白口、白魚尾、書名、卷数、丁数を記す。

近衛家における蘇軾の詩文

劉大謨と王珩の序は左右双辺、每半葉八行、毎行一七字、有界、白口、黒魚尾。三集末後跋四種は、左右双辺、每半葉八行、毎行一四字、有界、白口、白魚尾。白綿紙。末一葉裏打ちの補修を施す。

表紙 (二七・〇×一七・三センチ) は白練色、五針眼。「樂城集幾」と打付け書き。各冊首葉に「大觀樓藏書」「含情／齋印」「肅軒」の白文方印、他一種朱文方印の旧蔵者蔵書印あり。さらに「陽／明／藏」の白文方印は近衛家熙の収蔵であることを示す。明治時代の「陽／明／藏」の朱文方印、京都大学収蔵時の「京都／大学圖／書之印」「近衛本」の朱文方印がある。

二種の序に朱引き、朱の断句・傍点。本文卷一、一五・後集卷四・三集卷一には朱墨の断句・朱引き、朱で押韻の韻目を書き入れ。さらに墨で返点・付訓、郭外に細字の書き入れを施す。書入れは複数の手による。書入れは卷二、一二に多く、「馮説二」の注解・音注・語注を記す。書根に「樂」及び卷数を墨書する。

二、近衛家における蘇軾受容

近衛家に収蔵された蘇軾に関係するこれらの詩文集を、誰がどのようにに読んだのか、以下では当主ごとに、漢学への関心を含めてみてみよう。

(一) 近衛政家 (一四四四—一五〇五)

近衛政家は第一三代当主で、文明一一 (一四七九) 年関白となり、長享二 (一四八八) 年太政大臣に任ぜられた。室町時代、第九代將軍足利義尚の頃である。室町時代中期頃からは、禅僧による蘇軾、黃庭堅、『三体詩』や『古文真宝』の講釈が盛行し、公家社会にも波及した。従来の公家の文学は、和歌を中心とし、『文選』『白氏文集』を除けば漢文学に対する知識は多くはなかった。したがってこの時期は、

近衛家における蘇軾の詩文

日本の文学と漢文学の融合が顕著であるとされる。政治家は、少なくとも二度自邸で蘇軾の詩の講釈を聞いている。文明一三（一四八一）年八月から翌年三月にかけて要西堂という僧侶に、また明応四（一四九五）年二月には堤西堂に講義させ、多くの公卿がこれを聴講した。政治家に直接関わる蘇軾の詩文集はないが、近衛家における蘇軾の受容は、この会が契機となったと思われる。

（二）近衛信尹（一五六五—一六一四）

先に紹介した書籍を収集した当主として確認できる最も早い人物は、第一七代当主近衛信尹である。信尹と彼の後を継いだ信尋（後陽成天皇と信尹の妹との間に生まれた子、一五九九—一六四九）は当時の公家社会の中心人物と言える。一（一）『王状元集百家註分類東坡先生詩』に「天正十三年 内大臣 信輔」の識語を書いたのは信尹である。幼名は明丸、天正五年八月に元服して信基、天正一〇年に信輔、さらに慶長年間に信尹と改名した。以下では信尹と表記する。書入れの天正一三（一五八五）年は三月一〇日に左大臣に転じており、巻四末の書入れは、この日以前に記されたことがわかる。

天正年間には、戦国時代の幕を閉じた織田信長、その後を継いだ豊臣秀吉の活躍した時代で、信尹はその影響を強く被った。すなわち、書入れの天正一三年、秀吉は権大納言から内大臣に昇り、さらに左大臣を希望した。これに連動して信尹は右大臣から左大臣へ、そして天正一三年五月から七月にかけて関白の二条昭実とその座をめぐって「関白相論」の論争を繰り広げた。しかしその結果、調停すると称して自ら申し出た秀吉が関白に就任した。この一連のできごとの発端は、天正一二年一二月、一条内基の関白・左大臣辞任にある。信尹は、このあわただしい生涯の転機に、蘇軾の詩集を読んでいたのである。

なお、その後信尹は、秀吉に疎まれ、後陽成天皇の勅勘を被って薩摩のくに坊津に流罪となった。彼はそこで坊津八景の詩を作っている。

日本の南端に流罪となつてなお当地を漢詩に詠じた彼の運命と強靱な精神とは、中国南端の海南島に流罪となつて陶淵明に和して詩を連作した蘇軾を彷彿とさせる。許されて帰京した信尹が関白になったのは、徳川幕府に変わってからの慶長一〇（一六〇五）年である。

信尹は和歌・連歌に秀で、能書家として知られる。彼の書は、法号によって三藐院流と呼ばれる。力強く闊達自在なその書風は、坊津配流を境に生み出された。黄庭堅の影響も受けたと言われる。当然、北宋三筆のひとり蘇軾の書も学んだと考えてよく、彼の書の風格に蘇軾の精神の反映を見ることが許されるのではないだろうか。

一（二）『東坡先生詩』、一（七）『五先生小簡』の鈔写は慶長年間（一五九六—一六一四）と見られる。この鈔本は信尹の書写ではないが、「近衛蔵」の朱文長方印もあり、彼の在世中に収蔵されたと考えられる。慶長年間には、長い戦乱の後の文芸復興期である。後陽成天皇や徳川家康が木活字を用いた出版事業を行い、漢籍では『四書』や『古文孝経』『貞観政要』『周易』などを出版した。一（八）『四河入海』もそのひとつで、鎌倉・室町時代の坡詩注釈四種を集大成した書物である。『四河入海』にも『王状元集百家註分類東坡先生詩』にも多くの書入れが施されるが、大部分は信尹の筆ではない。信尹は禅僧の書入れや抄物を読んで自学したのであろう。

なお、陽明文庫には「近代十三経正義次第」の外題を持つ六丁の和綴じ横長の文書がある。第三丁に白紙を挟み、二丁までに漢籍の、四丁以後には和書の書名が、信尹の手によって記されている。筆跡は坊津配流以前のものである。ここにも「東坡」の文字が見える。信尹の関心を示す資料として、以下に漢籍部分を示す。「は行頭を、（一）は筆者の補足、？は仮の翻字であることを示す。

（一丁表）

「近代十三経正義次第」 「孝経 論語 孟子 「爾雅 周易 尚書 「毛詩 左伝 公羊伝 「穀梁伝 周礼 儀礼 「礼記 「上古者莊老ヲ入テ孝爾ヲ不入 「史記 西漢 東漢 「資

治通鑑 釈氏々々 三国志 「方輿勝覽 新書 国語」 「淮南子 貞観政要 事文類集」

〔二丁裏〕 「百川学海 列女伝 文選」 「翰墨全書 莊子 漢玉篇」 「帝軌 臣軌 列子」 「十八史略 十七々々 十九々々」 「老子 光明蔵 性理大全」 「広韻 韻会 韻府」 「太宗記 江湖集 詩苑」 「傳子 洪氏玉韻 孫卿」 「千字文 蒙求 胡曾詩」 「堀識 讃文論 顔子」 「代要論 上略」

〔二丁表〕 「汝衍事銘 要覧 葛氏」 「応祝 韓詩外伝 孝子伝」 「天下白 玉海 押韻」 「詩人玉屑 詩学大成 続々」 「詩学集成 詩格 氏族排韻」 「杜工部 東坡 山谷」 「李白 白氏文集 昌黎文集」 「柳文 三体詩 五音集韻」 「海篇直音 礼部韻 台譜」 「要覧 野録 万宝詩山」 「残義兵歌 楊誠齋 楊子法言」

〔二丁裏〕 「歐蘇手簡」 「唐史」 「源遠至論」 「古文真宝 曉風集 帳中香」 「墨の界線あり」 「六韜 三略 司馬法」 「孫子 太宗問答 呂子」 「尉繚子 大学 中庸」 「聡芳集 閑居編 家語」 「紫微通鑑」

詩人では唐の李白と杜甫、宋の蘇軾と黃庭堅、楊萬里が記され、別集では唐の白居易と韓愈、柳宗元が見える。『三体詩』『古文真宝』については信尹の聞書きも残る。蘇軾に関して言えば、その作品が収録される『古文真宝』のほか、『歐蘇手簡』が見える。――(七)『五先生小簡』にも蘇軾が冒頭に収録されており、書簡作成の参考としたものだろうか。信尹は比較的若いころから蘇軾の詩文を愛好していたのであり、その影響は強いものがあるといえよう。

〔三〕 近衛基熙（一六四八―一七二二）

第二〇代当主であり、延宝五（一六七七）年左大臣に、また元禄三（一六九〇）年に関白となった。――(五)『東坡先生詩集』は、出版の明暦三（一六五七）年には、基熙の父尚嗣はすでに死去してお

近衛家における蘇軾の詩文

り、次の当主家熙の白文方印「陽／明／蔵」の収蔵印もないので、基熙が収蔵したものと思われる。四代將軍徳川家綱の時代、政治は安定し、大阪・京都を中心として都市の民衆の文化が花開いた。幕府は朱子学を広め、庶民にも教育が広がっていった。『東坡先生詩集』が、本文にも注にも訓読を付すのは、このような教育の場で用いるのに便利だったからだろう。『東坡先生詩集』の出版者は二代目林和泉掾、出雲寺時元である。初代の元真が勅許により和泉掾を名乗り、朝廷へ出入りするようになった。²⁰ 当然のことながら公家も大切な顧客であり、基熙のもとへも二代目が直接持ち込んだものだろう。なお、家熙以前に用いられた朱文方印「近衛蔵」の蔵書印のない――(四)『東坡集選』も彼の購入にかかるとと思われる。

〔四〕 近衛家熙（一六六七―一七三六）

第二一代当主。宝永四（一七〇七）年関白、六（一七〇九）年摂政、七（一七一〇）年太政大臣と官位を進め、享保一〇（一七二五）年落飾し予楽院真覚虚舟と号した。――(三)『東坡先生全集』及び――(九)『樂城集』には彼の蔵書印「陽／明／蔵」の白文方印がある。また――(八)『物類相感志』には蔵書印はないが、家熙の手による書入れがある。

何事につけ根源を追求する学究的資質から、家熙は諸芸に卓抜した成果をあげた。書と茶では当代第一となり、書の名跡を集帖した『大手鑑』は国宝に指定されている。漢籍では、『大唐六典』に校訂を施し、没後『考訂大唐六典』として出版され、今なおその価値を失わない。²¹ 現在陽明文庫に収蔵される資料の過半数が家熙と関わりがあると言われ、漢籍もその大部分は彼が購入したものである。彼の鑑識眼は高く、元版『湖海新聞夷堅続志』、明内府旧蔵『文献通考』、朝鮮版『漂海録』など善本を購入しており、特に明律方面には『大明律例註釈招擬折獄指南』『皇明詔制』など、伝本の少ないものも多い。²²

近衛家における蘇軾の詩文

家熙の侍医でもある山科道安は、家熙のもとに親しく出入りし、享保九（一七二四）年から一二年間、サロンでの出来事や家熙の発言を『槐記』に綴った。その中に、蘇軾の名が三回、蘇轍が一回現れる。

蘇軾への言及の初出は、享保一〇（一七二五）年五月一七日、「八景」の出処を尋ねられて、『大明一統志』だと答える条中に、

世間ニ流布セル、玉澗ガ八景ト云フモノハ、断テ出処ナシ。世ニ云伝ル、東山ノ義教、此八景ノ画賛アリケルヨリシテ、世ニモテハヤス。コレヲ西湖ノ八景ト云。然レドモ外ニ出所ナシ。東坡ハ景ノ詩アリト云人アレドモ、未見。

と発言している。

二度目は、同年九月二八日夜、江戸から流行してきた「似タ物揃、シレヌモノ揃」の話題に、

此コトハ、日本ニテ仕ダシタルコトニアラズ、漢ニモ出タリ。東坡山谷、ナドガ作ニ、甚ヨク云オホセルアリ。近日拔出シテ、御見セアルベシト仰ラル。説郭、青山雜纂続集、

と言いつけている。

また、享保一四（一七二九）年八月二四日、「硯屏」のことは古い詩文にあるのではないかとの質問に、

硯屏ハ東坡ヨリ何誰ニヤラン贈タルガ初ナリト、覚エタリトテ御考ナサル、洞天清祿ニ、硯屏ノ始リシコトヲ記シタリ、是ノミナラズ東坡ヨリ山谷ニ贈タリトヤラン、山谷ヨリ東坡ヘ贈リタルヤランノ詩アリト覚タリ、考ヨト仰ニテ、内府公ニモ、拙モトモニ彼是ト考ル中ニ、円機活法ノ硯ノ次ニ硯屏ヲ出シテ、蘇軾ノ五言絶句ヲ載セタリ、サラバトテ、蘇文忠公全集ヲ考合サセラルルニ、アリアリト東坡ヨリ范文公ヘ、硯屏ヲ贈リシ詩ヲ載テ、活法ノ詩ト同ジ、併シカレハ古風ノ長篇タリ、活法ニハソノ中四句ノミヲ切テノセタリ、是ニテ活法ナド、凡テ雜書ノ頼ミニナラヌコトヲ可知、他所ヲ此書ニ用タルコトヲ、本文ナシニ引キ用ルハアブナ

キコトナリト仰ラル、

と述べている。本条にいう『蘇文忠公全集』は一一（三）『東坡先生全集』であろう。

そのほか、同年二月二日には、

今日蘇子由（軾）ガ欒城集（五十卷、廿五冊）、ヲ持来レリ、世ニ珍シキモノ、由、百拙モ終ニ不見ト申ス、堀七大夫ハ書写シタリト承ルト申ス、召上ラレタリトテ御見セナサル、又百拙ガ執次ニ典籍便覧ヲ（堀正脩ガ本ナリ）御カリアソバシテ御覧アル間ニ御重宝ノコトアリトテ御見セナサル、殊勝ノ明朝本ナリ、物ニ引テハアリ、終ニ如此ノ本書ハ御覧ナサレズト仰ラル、

の記事がある。（一）内は原注。一一（九）の明の銅活字本『欒城集』は「殊勝ノ明朝本」との評価にふさわしい。この時買入れたものとしてよいだろう。

右の諸条をみると、家熙にとっては蘇軾の作品は作詩の手下ではなかったようだ。蘇軾は政治家としても文学者としても有名だが、書画や音楽をはじめ食事にさえも旺盛な好奇心を抱き、多くの詩文を残した。一一（八）『物類相感志』に蘇軾の名を冠するものもこうした面を反映したものだろう。家熙は、『物類相感志』に、漢語で記された物の和名を朱書するほか、博物学的な記述も残している。たとえば「橄欖」には右に「カンラン」と音を朱書し、左にも朱で「有景、色青、唐ヨリ渡ル、和名不知」と記す。また「韃靼見酒駱駝見柳」には「韃靼人化国見酒腰不立、駱駝ハ上ノ文ト同意」と朱書するなど、異国の風物に興味を感じたようである。『槐記』では享保一二（一七二七）年四月二三日に「医書ニ、龍骨ト云モノアリ、何物ゾ」と尋ねられたことから問答があり、二六日夜参上した折には、「龍易骨、琥珀吸塵ノ説」を摘録して道安に下されたとの記事が見える。

龍易骨、蛇易皮、麋易角、蟹易螯、造化權輿、（潜確類書）
磁石引針、琥珀拾塵、（物類相感志）

の二条がその摘録である。蘇軾の詩文は、博学の家熙にも様々な刺激と知識をもたらしたようである。

近衛家の人々がどのように蘇軾を読んだのかを、以上に概観した。陽明文庫にはほかに蘇軾詩の聞書などの断片的な資料が存在するといふ。しかし、二〇万点に及ぶと言われる古記録や文書の類の全貌はいまだに明らかでない。ここでは、蘇軾の詩文集を例として、その受容の様子を述べた。

蘇軾に代表される宋詩は、日本では鎌倉室町五山の禅林を皮切りに長らく流行したが、江戸において荻生徂来ら護園学派が李攀龍を尊崇し、享保九年、服部南郭が『唐詩選』を刊行したのを契機に、宋詩に変わって唐詩・明詩が流行することとなった。本稿にとりあげた四人の当主は室町時代中期から江戸時代中期まで、ちょうど宋詩流行の時期にあたる人々であり、時代の趨勢のなかにあるように見える。ただ、日本文化の体現者であるべく生まれた近衛家当主は、一時の流行に止まらず、また禅僧や護園学派の人々が自らの作詩のために蘇軾詩や『唐詩選』を読んだのとも立場を異にし、教養の基礎として蘇軾の詩文を必要としたと言えるのではないだろうか。その結果、蘇軾の学才の大きさを、禅僧とは違う立場で発見していたように思われる。

- 1 芳賀幸四郎『近世文化の形成と伝統』所収「近世文化の形成と伝統」「光悦の芸術とその基盤」思文閣出版、昭和五六年
- 2 道元著・中村宗一他訳『全訳正法眼蔵』誠信書房、昭和四六年による。
- 3 芳賀幸四郎『東山文化の研究(上)』第一篇、「五山禅僧の教養と世界観」第二章、五「詩集・文集・詩話」思文閣出版、昭和五六年
- 4 祝尚書『宋人別集叙録』巻九「王状元集百家注分類東坡先生詩」、中華書局、一九九九年

近衛家における蘇軾の詩文

5 注4に同じ

6 『王状元集百家注分類東坡先生詩』は書名が示すとおり、主題別に分類された詩集で、巻一は「紀行」、以下「述懷」「詠史」「懷古」「古跡」「時事」、建築物が続き、巻四は「城郭」「壁塙」「田園」「宗族」「婦女」「仙道」「积老上」、巻五は「积老下」「寺觀」、巻六は「塔」「節序」「夢」「月」である。

7 阿部隆一「増訂中国訪書誌」第一篇「中華民国国立故宫博物院藏楊氏觀海堂善本解題」汲古書院、一九八三年。明末には明萬曆三四(一六〇六)年茅維刊本が幾種か翻刻された。

8 瞿冕良『中国古籍版刻辞典』「宝翰楼」齐鲁書社、一九九九年

9 劉尚栄『蘇軾著作版本論叢』明版蘇軾文集選本考述「一、総合性選本簡介」一〇『東坡集選』五〇巻、巴蜀書社、一九八八年

10 前掲『宋人別集叙録』巻九参照。

11 前掲『蘇軾著作版本論叢』明版蘇軾文集選本考述「四、偽作小考」

12 前掲『宋人別集叙録』巻一〇

13 芳賀幸四郎『中世文化とその基盤』所収「東山文化」「大陸文化へのあこがれと王朝文化への郷愁」思文閣出版、昭和五六年

14 注10。また前掲『東山文化の研究(上)』第一篇、「公家の教養と世界観」四「詩集・文集」思文閣出版、昭和五六年

15 前田多美子『三藐院 近衛信尹』思文閣出版、平成一八年。また本書によれば、信尹への改名申請は慶長二年、慶長四年以後は詠草などに信尹と署名している。

16 『公家補任』「正親町天皇(天正二年―三年)」による。

17 『鹿兒島大学附属図書館貴重書公開 江戸の眼神 薩摩の名所図絵展図録』第一部「鹿兒島八景」、高津孝解説、二〇〇〇年。なお信尹は、中国における瀟湘八景にならって近江八景に始まる日本の八景詩の伝統を開いたという点でも漢文学の影響を強く受けていることがわかる。

近衛家における蘇軾の詩文

- 18 別冊太陽愛蔵版『書道 人と名品』堀江知彦撰「能書三十家」上代と唐様「第二章 能書家列伝」平凡社、一九七九年
- 19 陽明文庫「信尹公御筆聞書」（四九〇一五〃四九〇三一）には「韓文」と「三体詩」の聞書が見られる。
- 20 宗政五十緒『近世京都出版文化の研究』同朋舎出版、昭和五十七年
- 21 『唐六典』（中華書局、一九九一年）の凡例では「用功最多、成績最突出」と評価されている。
- 22 大庭脩『漢籍輸入の文化史』（研文出版、一九九七年）「八、將軍家と御儒者衆―享保前半」によれば、八代將軍徳川吉宗は明清の法律を喜んだとのことであり、家熙もその影響を被ったのであろう。ただし彼の研究は、平安貴族政治のモデルとなった『大唐六典』に向かった。
- 23 『槐記』の引用は、近衛家熙口授、山科道安筆記、佐伯太注釈『槐記注釈』立命館出版部、一九三七年による。また家熙の漢学については、拙論『槐記』にみえる家熙公の読書生活」（和漢比較文学第一号、一九八五年一〇月）がある。
- 24 張心激『偽書通考』（商務印書館、一九三九年）子部「雜家」には「偽題撰人」とする。
- 25 村上哲見『漢詩と日本人』講談社、一九九四年
中村幸彦「京学の唐詩選」（和漢比較文学叢書第七卷『近世文学と漢文学』汲古書院、昭和六三年）
本稿を執筆するにあたって調査をご許可くださった陽明文庫および京都大学中央図書館に感謝申し上げ、また陽明文庫名和修文庫長に多くのご教示を賜ったことを記して御礼申し上げます。

（本学准教授）